

第27回／03年度 受賞者発表

井植文化賞

戦後、日本の復興と繁栄に大きな足跡を残した三洋電機株式会社の創設者、故井植歳男氏の遺志により、昭和44年11月に「財団法人井植記念会」が設立されました。同会は、兵庫県在住、またはゆかりのある個人、あるいは団体で、それぞれの分野で目覚しい活躍をされたり、多大な貢献をされた方（団体）の功績を賛え、地域社会のよりいっそうの発展に寄与したいと、昭和48年に「井植文化賞」を制定しました。

第27回の今年の6部門の受賞者は、選考の結果、次のとおりに決定しました。受賞者にはライオンのブロンズ像と、副賞として賞金（個人30万円、団体50万円）が贈られます。

■ (財) 井植記念会
神戸市垂水区青山台1・21・1
TEL 078・751・5216

第27回井植文化賞表彰式 平成15年10月18日（土）午前10時30分から

■文化芸術部門

田中 ひな子
〔作家〕

島 京子

●選考委員

竹内 和夫

〔作家〕

野元 正

〔作家〕

島 京子

●選考委員

竹内 和夫

〔作家〕

野元 正

〔作家〕

■科学技術部門

薄井 洋基

〔工学博士・神戸大学工学部応用化学科〕

森脇 俊道

〔神戸大学工学部長〕

真山 滋志

〔神戸大学農学部長〕

守殿 貞夫

〔神戸大学医学部長〕

前川 昌夫

〔神戸新聞社取締役〕



■社会福祉部門

神戸コスモス

〈監督・岩崎広司〉

●選考委員

野上 文夫

〈平安女学院大学教授〉

橋本 明

〈家庭養護促進協会事務局長〉

森本 章夫

〈神戸新聞社論説委員長〉

■地域活動部門

垂水生活文化協会

〈会長・堀口東四郎〉

●選考委員

林 五和夫

〈ふるさとひょうご創生塾塾長〉

並川 明子

〈兵庫県教育委員会委員長・和弘学園理事長〉

■報道出版部門

神戸新聞写真部

〈部長・清田哲士〉

●選考委員

村井 顯彦

〈ラジオ関西代表取締役社長〉

原口 洋一

〈NHK神戸放送局長・和弘学園理事長〉

上羽 慶市

〈神戸新聞社論説特別顧問〉

■国際交流部門

特定非営利活動法人

ブレーンヒューマニティー

〈代表・能島裕介〉

●選考委員

西田 裕

〈兵庫県国際政策課国際交流局長〉

住野 和子

〈神戸YMCAクロスカルチャーユニバーサルセンタープログラムディレクター〉

石坪 正之

〈神戸市国際協力交流センター専務理事〉

（顔不同）

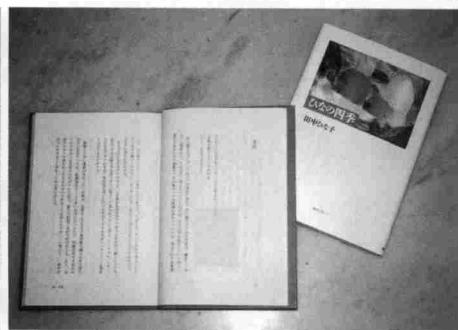
第27回 井植文化賞

「文化芸術部門」

日本人の心を感じる繊細な感性

田中ひな子

●選考委員
島 京子（作家）
竹内 和夫（作家）
野元 正（作家）



受賞作『ひなの四季』（編集工房ノア）

文化芸術部門は美術、文学、音楽が毎年交替制で選考が行われ、今回は文学関係からの選考となつた。

受賞作『ひなの四季』は、主として世紀末から新しい世紀にかけて三年間、京都新聞の「四季折々」「四季のエッセイ」に連載されたものをまとめたものである。京都郊外、洛南のまだ残っているひなびた風景・風物などを作者の日常生活と絡めて繊細な感性で綴つたほかに心温まる好エッセイといえる。その洗練された文章は新聞掲載中から外国人の日本語デキストとしても使われていたという。

また、この作品集には、混沌とした現代社会において私たちがとつぶに忘れてしまった、季節の移ろいとともに日々の生活を生きてきた日本人の心が息づいている。そういう意味でも、この作品群を二十一世紀初頭の今、時宜を得た秀作として推奨し、さらなる活躍を期待したい。

（野元正）

今年は若手よりも経験を積んだ書き手が多く推薦された。

現職の医師による異色の医療ミステリー「廢用身」の久坂部羊氏、芥川賞にも二回候補となり大阪文学協会理事をつとめ「不機嫌の系譜」を出版したばかりの木辺弘児氏、総合文芸誌「播火」などで小説・エッセーを執筆、空襲で他界した両親を自分の手で葬った経験を伝える「ふた筋の煙」、父と母を焼いた日」で神戸新聞文芸年間優秀作品賞を受けた木村和男氏、秀作品賞を受けた木村和男氏、中でも特に「善意通訳」で直木賞候補にもなったことがある田中ひな子氏の評価が高く今回の受賞となつた。

●受賞者メモリアル

1 河口龍夫	14 菅沼潤	〈演出家〉
2 山田幸平	15 宇江敏勝	〈作家〉
3 横井和子	16 光安義光	〈建築家〉
4 荒木高子	17 大前哲	〈作曲家〉
5 多田智満子	18 鈴木漢	〈詩人〉
6 田原富子	19 鳩木昭三	〈前衛美術〉
7 昇外義	20 甲南高等学校忠康一記念室	
8 安水稔和	21 佐伯敏光	
9 延原武春	22 植松奎二	〈彫刻家〉
10 山沢栄子	23 鈴木雅明	〈指揮者〉
11 神戸灘ライオンズクラブ	24 時里二郎	〈詩人〉
12 青木はるみ	25 小曾根實	〈ジャズミュージシャン〉
13 今竹七郎	26 山田脩二	〈淡路瓦師〉

第27回 井植文化賞

（科学技術部門）

流体学的な特性（レオロジー特性）
に関する研究の世界的権威

薄井 洋基



実験中の薄井洋基教授

物を運ぶときに水と一緒に流したら、少ないエネルギーでたくさんの物を運ぶことができる。例えば泥水やお粥のようないわゆる懸濁液のことを、専門用語でスラリーといい、薄井教授は、このスラリーなどの流体学的な特性（レオロジー特性）に関する研究では、わが国を代表する世界的な権威である。特にスラリーの製造、輸送、貯蔵技術に関して、理論ならびに実験

たる、少ないエネルギーでたくさんの物を運ぶことができる。例えば泥水やお粥のようないわゆる懸濁液のことを、専門用語でスラリーといい、薄井教授は、このスラリーなどの流体学的な特性（レオロジー特性）に関する研究では、わが国を代表する世界的な権威である。特にスラリーの製造、輸送、貯蔵技術に関して、理論ならびに実験

●選考委員
森脇 俊道（神戸大学工学部長）
真山 滋志（神戸大学農学部長）
守殿 貞夫（神戸大学医学部長）
前川 昌夫（神戸新聞社取締役）

的な研究で大きな成果をあげておられ、その研究成果は関連の学会からも高く評価され、多くの賞を受けている。

薄井教授の最近の興味ある研究成果の一つとして、水の微粒子を水と混ぜた懸濁スラリーを潜熱輸送媒体として工業用に利用する研究がある。具体的にはこのスラリーをパイプを使って必要なところに輸送し、その潜熱を利用してビルなどの冷暖房に利用しようとするものである。同教授は輸送における流動抵抗を低減し、わずかなエネルギーで冷暖房を可能とする技術を開発した。そしてそのための実証プラントを、神戸市が建設し神戸大学との共同研究に提供して頂いている復興支援工場内の実験室に設置し、地域との産学連携にも貢献している。このように薄井教授の研究成果は、学術上のみならず実用面からも高く評価されており、井植文化賞（科学技術部門）に値する。

（森脇俊道）

■選考経過

本年も工学、医学、農学などの分野から、いずれも世界的に活躍する著名な研究者が何人か推薦され、選考委員会では大変頭を悩ませた。その理由は異なる分野の方々を比較することは大変困難であることによる。そこで今回は、研究内容や、社会貢献なども加味して、工学の分野から推薦することを決め、結果として全員一致で薄井教授が候補者として選ばれた。なおこれまで候補として推薦された方々のお名前を、選考経過の中で明らかにしていたが、異なる分野の方々であり、お名前を出すことはかえって失礼ではないかということから、選考途中で推薦された方々のお名前は、これからは公表しないこととした。

●受賞者メモリアル

- | | |
|---------------------|-----------------------|
| 1 櫻井春輔（岩盤力学） | 14 安田武司（熱帯有用植物学） |
| 2 杉山武敏（遺伝子学） | 15 廣畠和志（整形外科学） |
| 3 土田広信（農芸化学） | 16 神鳥安啓（応用科学） |
| 4 嶋田勝次（都市計画・建築学） | 17 加藤征史郎（生殖生物学） |
| 5 沢村誠志（障害者の社会復帰） | 18 天津睦雄（耳鼻咽喉学） |
| 6 安藤四一（音響の研究） | 19 山本恵一（電子工学） |
| 7 辻莊一（家畜育種学） | 20 真山滋志（植物病理学） |
| 8 西塚泰美（生化学） | 21 水野耕作（整形外科学） |
| 9 中岡睦雄（パワーエレクトロニクス） | 22 森脇俊道（精密工学） |
| 10 清水晃（微生物生態学） | 23 上坪宏道（加速器物理） |
| 11 岡田安弘（脳機能生理学） | 24 春日雅人（糖尿病治療の研究） |
| 12 賀谷伸幸（計測工学） | 25 大塚絢雄（生物資源のサイクル化研究） |
| 13 田中千賀子（薬理学） | 26 富永圭介（フォトサイエンス研究） |

第27回 井植文化賞

（社会福祉部門）

神戸コスモス

障害者野球のパイオニア



▲ 公式戦100連勝の、
神戸コスモスの選手たち（写真／神戸新聞社提供）

●選考委員
野上 文夫
（平安女学院大学教授）
橋本 明
（家庭養護促進協会事務局長）
森本 章夫
（神戸新聞社論説委員長）

チーム名「COSMOS」（コスモス＝宇宙）には、障害者に野球を広めたいという願いがこめられている。

一九八一年にチーム結成。試合を重ねながら、盗塁禁止や足の不自由な打者に代わって走る「打者代走」などを基本とした全国統一ルールをつくり上げ、その呼びかけで全国30チーム、71人が加盟する日本本身障者野球連盟を発足させた。

監督の岩崎広司さんを中心に行なう40人を超える選手が集まり、92年秋から公式戦負けなしの快進撃を続ける。今年6月の第11回全国身体障害者野球大会で大会9連覇を達成するとともに、公式戦100連勝の偉業を成し遂げた。障害者の可能性を示す活動の意義は大きい。〈森本章夫〉

スモス＝宇宙）には、障害者に野球を広めたいという願いがこめられている。

一九八一年にチーム結成。試合を重ねながら、盗塁禁止や足の不自由な打者に代わって走る「打者代走」などを基本とした全国統一ルールをつくり上げ、その呼びかけで全国30チーム、71人が加盟する日本本身障者野球連盟を発足させた。

チーム名「COSMOS」（コスモス＝宇宙）には、障害者に野球を広めたいという願いがこめられている。

一九八一年にチーム結成。試合を重ねながら、盗塁禁止や足の不自由な打者に代わって走る「打者代走」などを基本とした全国統一ルールをつくり上げ、その呼びかけで全国30チーム、71人が加盟する日本本身障者野球連盟を発足させた。

●受賞者メモリアル

- | | |
|---------------------|---------------------------|
| 1 福来四郎 | 14 神戸いのちの電話 |
| 2 小畠延子 | 15 芦川記念館 |
| 3 神戸市立共生養護学校 | 16 点訳ボランティアグループ連絡会 |
| 4 春本幸子 | 17 KOBE在宅ケアボランティアグループほほえみ |
| 5 富永繁男 | 18 横崎茂登子 |
| 6 神戸大学看護ボランティア | 19 楽団あぶあぶあ |
| 7 米田寛子 | 20 神戸ライフ・ケア協会 |
| 8 神戸東部地域入浴サービス実施委員会 | 21 神戸新聞厚生事業団 |
| 9 清井安太郎 | 22 鈴木郁 |
| 10 山本博繁 | 23 ボランティアグループやすらぎ |
| 11 エリア会OHPこうべ | 24 メインストリーム協会 |
| 12 誕生日ありがとう運動 | 25 木村佳友 |
| 13 兵庫ボランティア協会 | 26 家庭養護促進協会 |

■選考経過

今年は、長年の功労への評価が高い兵庫県おもちゃライブラリーをはじめ、障害者の団体を調整する支援を行なう「ひょうごヘルプ」への虐待、暴力を未然に防ぐ活動に力を入れている森田ゆみ氏主宰の「CAPセンター・グループ」、子どもたちの作業所や働く場所を提供する活動を広げる「トップステーション」が候補にあがった。特に『神戸コスモス』の公式戦百連勝に注目が集り、さまざまな障害のある人が楽しんでスポーツに参加している『神戸コスモス』に受賞が決定した。

第27回 井植文化賞

「地域活動部門」

「文化の薫り高いまちに」

垂水生活文化協会

およそ三十年前の区民会議から現在のまちづくり会議まで、神戸一“住みよいまち”になることを願って活動してきた各団体代表者



『たるみ平成万葉集』短歌の部の入選者と共に

井植記念館で行われた「描こう！たるみのまち写生大会」での入賞者表彰式

が、互いに協力し一層文化活動を盛んにして更に文化の薫り高いまちにしようと、平成六年三月、堀口東四郎氏を中心に垂水生活文化協会を設立されて十年。毎年秋に総合文化祭を開催して絵画、書、手工芸、写真など、区民から公募して展覧会を開催、舞台部門も音楽や舞踊などレバンテホールで発表の機会を作っている。

毎月各方面から講師を招聘して講演会を開催したり、文芸部門では平成七年から毎年公募してきた短歌・俳句・川柳の入選作品を、会の設立十周年の記念に『たるみ平成万葉集 卷第一』としてまとめ発刊された。昨年からは青少年の部も設けて老若男女それぞれが喜んで参加している。住民が主になり役所も陰からそつと手伝うこのやり方は、今日理想とされる官民協働の先駆けであり、今後ますます協力して地域文化振興に大きく貢献されることを期待している。

（並川明子）

●選考委員
林 五和夫 ふるさとひょうご創生塾塾長
並川 明子 ふるさとひょうご創生塾塾長
小泉美喜子 月刊神戸つ子編集長

■選考経過

今回は但馬の芸術文化の振興に大きな貢献された和田隆男氏の各方面にわたる活動歴が注目された。また兵庫県いけばな協会の五十年の長きにわたる活動も話題となつた。

その他各地域の活動団体が候補に挙がつたが、昨年もその活動が注目された垂水生活文化協会（会長堀口東四郎）が設立十周年を迎えた。八年間の短歌・俳句・川柳の公募入選作品をこのほど出版された。毎年新たな工夫を加え地域文化の振興に活動を続けてこられたことを高く評価し全員一致で決定した。

●受賞者メモリアル

1 城崎郡日高町	14 松島興治郎
2 明石市民のコミュニティ活動	15 山村留学制度
3 一宮町文化協会	16 山村硝子株式会社
4 尼崎郷土史研究会	17 御淡路青年会議所
5 尻池南部地区自治連合協議会	18 保健医療福祉ICカードシステム開発検討委員会
6 月刊神戸っ子	19 情報センター
7 明延ふるさとづくりの会	20 洋菓子KOBExpo
8 KICS	21 戸谷松司
9 丸山地区住民自治協議会	22 中西通
10 アンドレ・ブリュエ	23 宝塚NPOセンター
11 神戸新聞文化センター	24 武田清市
12 尼崎市演劇連絡協議会	25 横谷温子
13 ブナを植える会	26 一絃須磨保存会

第27回 井植文化賞

（報道出版部門）

絶滅が危惧されている兵庫の動植物の「いま」を報道

神戸新聞写真部

「いのちのまほろば—身近なレッドデータ」



▲ 神戸新聞映像センター写真部（いのちのまほろば取材班）

◀ コアジサシの取材風景（西宮市甲子園浜）

●選考委員
村井 観彦（ラジオ関西代表取締役社長）
原口 洋一（NHK神戸放送局長）
上羽 慶市（神戸新聞社論説特別顧問）

私たちの周りの自然が、どんな状況にあるのか。環境省が発表したレッドデータブックをもとに、絶滅が危惧されている兵庫の動植物の「いま」を報道し続けた神戸新聞写真部の企画連載「いのちのまほろば—身近なレッドデータ」が井植文化賞に選ばれた。

ついこの間まで見られた草花や虫たち、魚たちが、静かに、駆け足で姿を消してゆく。そんな失われゆく自然の姿を記録することが、二十一世紀につながる手掛かりになる」と二〇〇〇年六月に始めた写真企画は、自然を守る人々や研究者たちの協力を得ながら、今年三月まで計六〇回に及んだ。

「オネガイ、ソット、シテオイテ」。雪の下の水辺から顔を見せたアベサンショウウオにレンズを向けながら、カメラマンはそんな声を聞く。一枚一枚の写真に注がれるやさしいカメラのまなざしも評価された。

（上羽慶市）

○受賞者メモリアル

1 「あなたの手の手を」	14 「火輪の海」「メダルは笑顔に輝いた」
2 神戸空襲を記録する会	15 神戸新聞「ゴミ問題取材班」
3 兵庫県学校発生会／落合重信	16 「兵庫史を歩く」
4 サンテレビ「訪ねてみたい兵庫のまほろば」	17 「播磨学講座全四巻」
5 「手づくり」／春木一夫	18 コウベ・ドラマ8
6 「兵庫探検」「兵庫史を歩く」	19 神戸新聞コラム「正斗譲」
7 座「神戸中堅150社」	20 「いのち結んで」三条杜夫
8 神戸新聞淡路総局「淡路祭事記」	21 「イヌツンを追って」山本靖夫
9 「神戸からこんにちは」	22 AM神戸「風を抱け白鷺城」
10 「天津からこんにちは」	23 NHK神戸放送局「復興99」
11 「パルモア病院日記」	24 神戸新聞社説「大震災問わずにいられない」
12 「収録港湾労働神戸港」	25 季刊誌「Bancul」
13 「ひょうご経済人100人」	26 月刊神戸っ子

■選考経過

兵庫県のシニアの団体「げんきKOBE」が制作するシニア・高齢者・介護者向けの新しいタイプのラジオ番組「60歳からげんきKOBE」（AM神戸）、復興の道のりを克明に記録し実体験で知った危機管理の重要性を説いた『神戸発危機を管理する都市へ』（金芳外城雄編・日経ビジネス文庫）、官選最後の沖縄県知事となつた兵庫県出身の島田敏氏と荒井警察部長の、沖縄戦での命をかけた真実を描いた『沖縄の島守』（田村洋三著・中央公論新社）、神戸新聞写真部が編集した『いのちのまほろば』があげられた。

特に『いのちのまほろば』が写真の素晴らしさとともに、兵庫の自然がどのような状況にあるのかを、動植物を通して知ることができると評価が高く授賞決定となつた。

また、「いのちのまほろば」が写真の素晴らしさとともに、兵庫の自然がどのような状況にあるのかを、動植物を通して知ることができると評価が高く授賞決定となつた。

第27回 井植文化賞

～国際交流部門～

多様性を追求する若者団体

特定非営利活動法人 ブレーンヒューマニティー

海外での住居建設を行う若者たち



途上国と先進国の別を問わず、現在ほど子供が生きづらい時はないのではないかだろうか。グローバリゼーションの激動に伴い、経済格差はいやが上にも広がり十二億の人達が一日1ドル以下の暮らしを強いられている中で、必ずしも子供の人権は尊重されずに“不登校”や“引きこもり”、はたまた暴力や犯罪にまでエスカレートしている。“次代を担う子供たちをこのままにして置いてはいけない”と親でも先生でもない、より身近な存在であるお兄さんお姉さん格の大学生が八年前から立ち上がり、子供の“居場所づくり”や“明日に生きる力”を育む手助けをされているのが、今回受賞した特定非営利活動法人ブレーンヒューマニティーである。子供や若者が自發

的に多様性を尊重して生きることが出来る環境つくりを推し進めている。三年前からは、ローカルコミュニティ活動で培った“多様性”をグローバルに海外の人々との協働作業にまで実現させている。二〇〇一年度には、高校生二十人が国際NGOのHabitat for Humanity internationalとのネットワークでフィリピンの貧困地域で住居建設を、昨年はアメリカのニューメキシコ州とフィリピンでワーキャンプを、今年はHabitat for Humanity Indiaをカウンターパートとしてインド・グジャラート州で西部地震の被災者の住居を、また、タイでハンセン病患者の支援を行う好善社との協力で療養所のグラウンドの建設に携わりつつ、現地の人達との交流を実らせている。

子供の生きづらさは実は大人自身の未熟さや生きづらさが原因ではないかといわれるこの社会で、若者が自身の力で子供たちと共に多様な価値を創造していくとする逞しさに熱い声援を贈りたい。

（住野和子）

●選考委員 西田裕（兵庫県国際政策課国際交流局長）

石坪和子（神戸市国際協力交流センター専務理事）

正之（神戸市国際協力交流センター専務理事）

■選考経過

まず阪神・淡路大震災の被災当事者をはじめとし、その後の復旧・復興・減災に携わる市民・学者・ジャーナリスト・企業・行政・国際機関・NGOなどが集まる核となる場として、二〇〇二年に設立されたNGO、CODE（海外災害援助市民センター）が候補に。NPO国際チャーランサンフル協会は、世界中のプロ・アマチュアのチエリスト千名以上が集う規模なチエロ・コンサートとチエロによるボランティア活動を通じて、人間の共生と永久平和を願う活動が評価された。また、緊急医療活動を行っているAMDA兵庫の名も挙げられた。最終的には、国際ワーキャンプ事業にも力を入れている特定非営利活動法人ブレーンヒューマニティーの活動にこれから期待も込めて受賞決定となつた。

●受賞者メモリアル

1 加藤一郎	9 ミニFM局 FMわいわい
（神戸日独協会名誉会長・ 神戸大学名誉教授）	10 関西パングラディッシュ・プロジェクト
2 神戸日本／チリ協会	11 古澤峯子
3 神戸YMCAクロスカルチャーラルセンター／留学生ホストファミリープログラム	12 兵庫県外国人学校協議会
4 CHIC	13 藤岡重司
5 アルカディア協会	14 高井恒匡
6 神戸ブータン友好協会	15 西垣敬子（宝塚アフガニスタン友好協会代表）
7 海星病院ボランティアグループ	16 張文乃
8 桑原泰業	（国際音楽協会理事長）
（関西日印文化協会会長）	

■没後18年
9月7日命日に寄せて

鴨居玲を語る

■鼎談

森本泰好

△神戸市立小磯記念美術館協議会委員▽

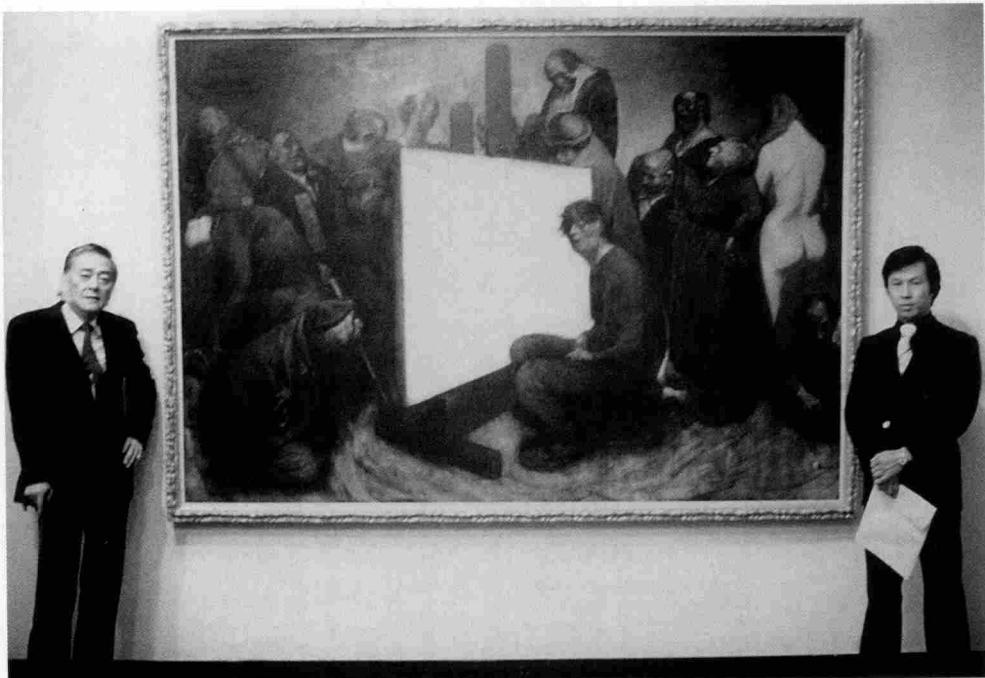
伊藤 誠

△美術評論家▽

久利計一

△三宮センター街・
マイスター大学堂代表取締役▽

画家・鴨居玲が突然他界してから、18年になる。没後20年を前に、鴨居と生前親しかった三人のゲストをお迎えした。今もなお熱狂的なファンを持つ彼の作品、神戸でも非常に目立った存在だった鴨居玲について語っていただいた。



「1982年 私」発表の日（1982年）
東京・日動サロンで鴨居玲（左）久利計一（右）

昭和26年、すごい画家が 神戸にやつて来る、と聞いた

——鴨居玲さんとは、どなたが一番はじめに出会ったのですか。

伊藤 それは私でしょうね。彼が来る前から、中西勝画伯なんかに「今度関西にすごいのが来るよ」と聞いていたんです。金沢の美術学校を出て、東京に就職したのだがうまくいかないので、田村孝之助の仲介で神戸に来た。昭和26年に来て、翌年、田中千代学園に就職し、私は六甲洋画研究所で会いました。画家としてかなり期待されていましたね。

森本 それはもう、あの美専の卒業作品を見たらそうでしょう。今見てもあの作品はいいですよ。

伊藤 それからよく一緒に飲み歩くようになります。したがね、鴨居さんはよく酔ってけんかして、大立ち回りをやって、時々仲間とぼくの名前を流用したようです(笑)。ある朝上司に呼ばれていくと、昨夜お前どこにいた、と聞かれるんです。ぼくにはまったく身に覚えはないのだけれど、誰かがぼくの名刺を出しているんですね。

森本 よく酔って車を乗り回して事故起こしたりしてたよね。

伊藤 とにかく普通の人ができないような自由さでしたよね。これはうらやましかったです。絵描きさんの特権なんでしょうけどね。

両極端が同居した画家

森本 これは最終的に結論になつてくるんだけど、あの人の中には常に両極端が同居していた。これ



伊藤 誠



久利計一



森本泰好

が魅力だったと思う。彼は転宅が多かったけれど、移動型というのは狩猟民族なんだよね。彼は一見バタ臭いけれど、「おれはやっぱり東洋人だ」と言っていた。6年間の海外生活をして、その結果として東洋人だったと。もっと長くヨーロッパにいて、ああいう絵を描かせたかった人はいっぱいいたと思うけれど、本人は帰ると言つて帰った。一方で、非常に破滅的な、人生の底辺を理念的に追いかけていくような面と、繊細な日本人の無常感というのを身につけた日本人のタイプと、両方が同居していく、それがおもしろかったね。美術評論家の坂崎乙郎さんが鴨居さんの絵を「昏い口マンチシズム」と言ったけれども、人間の本質といふものを追いかけていこうという理念的なことと、非常に感覚的なことが同居していた。絵の専門家ではない、絵が好きなだけのぼくらみたいな好事家が惹かれるところはそこだった。文学的だと言われたのはそういうところだったと思う。両極端が、マージナルで交じったというのが神戸のまことに似合った作家だと思う。神戸というのは東洋と西洋との接点でしよう。これは作家・陳舜臣が言つた言葉で「鴨居は神戸に似合った作家だ」と、そういう意味で、今、地震のあと神戸が復興課程で思い悩んでいるんだけど、その神戸の再生の手掛かりを求めるのに、鴨居を再評価したら答えが出てくる気がするんです。

久利 両極端はすごく持つていらっしゃいましたよね。ぼくはそばで見ていて、浪花節だなあと思うところはたくさんありました。それとお金なんかもバーッと使つているように見えて、とても細かかったですよね。晩年でも、貯金はこうしてとかいう話が多くて、ぼくなんか絵の話より、貯金

の話の方が多かったような気がしますよ（笑）。そのわりに、では通帳はどこに置くかといつたら犬小屋の下に置いておくとか（笑）どこか抜けているんですよ。大きく広がったる抜けたりするの神戸の良さにもつながりますが、ぼくが思うに鴨居さんは何をしても縛られない、こんなにしたらが魅力でしたね。さっき森本さんがおっしゃった居さんは何をしても縛られない、こんなにしたらあの人に悪いとか、あの先輩に気を使うということがなかつたので、鴨居さんは楽だったのではないかと思いますね。

森本 今の神戸でいちばん問題なのは、活力がないことだと思います。宮崎辰雄市長時代のすばらしいリーダーシップがあつて、あとにつながるのが都市経営に自信をもちすぎたんだと思う。自信をもちすぎると選択の幅がせまくなつて、多様性がなくなつて活力がなくなる。だからこんなときにマジナルな鴨居さんの仕事を再評価してみるとおもしろいと思いますね。

伊藤 おふたりがおっしゃるように二面性は持っていましたね。若い頃は鴨居さんも私も両方もろに出していったからよくケンカしました。鴨居さんは自分の仕事に関して核心をつかれるとキツとなることがあったようです。晩年は自分の繊細な面は、私には見せないようにしていましたが、自殺騒ぎが何回かあったなんて私は全然知らなかつた。大らかなゆつたりした一面ばかり見ていました。私も、仕事に関してこまかいことは言わんとこと思いましたし、むこうが言い出すまでアトリエにも入つたことがなかつた。家にも何回か行きましたが、アトリエへ行こうということはなかつたですね。

久利 ぼくは何回かアトリエへ上がらされました。



(写真左) 1958年オリエンタルホテルにて。左から姉・鴨居羊子、鴨居玲、田中千代、田村孝之介夫人

(写真右) 京町筋「赤ひょうたん」にて、左から鴨居、森本、若林和夫（在ブラジル）

写真提供／森本泰好

といつても絵を見せて意見は何も求めないんですよ。ただどない思う、とひとりごとのように聞かれるだけで。

伊藤 私は仕事の立場上ずばつと言つたんですが、悪く言つたわけじゃないんですよ。特に紙面に書くときは悪いことは書かない。その人がいいからどなたも取り上げるわけですが、彼はそこにつかかってきたんです。それがもとで大ゲンカになつて、以後、こういうことをやろうと思うがとか、この人の作品をどう見るかとかいう打診はあっても、あまり何も言わなくなつた。私が紙面に他の人のいいことを書くでしよう、すると黙つて絵を見にとんでいって、「見て来たけどあなたの言う通りだつた」と言つたりしていました。

久利 晩年、東京で個展をしたときに、ぼくもついていったのですが、朝ホテルで新聞を読んだら、鴨居さんの個展についてあまりいいことが書かれていなかつたんですよ。会場へ行つてから「新聞を持ってきてくれ」と言うので、むこうの方がその記事をはずして持つてきました。すると「まだあるやろ」と怒られて、その後（記事を書いた）評論家が控室に来て、延々と話されていましたね。「こういう展覧会については悪いこと書いてもらつた方がいい。ほめてもらあかんねん」と言われ、えらい先生やなと思いましたよ。

伊藤 それは年をとられたせいもあるでしようね。以前神戸新聞で織田正吉さんとの座談会の席で、「芸術というのは見る手の人生觀を変えるくらいのものでなくては意味がない。私はそういうものを作りたい」と言つてゐるのを聞いて、ああ変わってきてくれたんだなと思いました。若い頃ケンカしてよかつたなど。



(写真左) 1974年鴨居と共に神戸二紀会に所属する画家・西村功のパリのアトリエで久し振りに顔を合わせた鴨居、西村、伊藤（左より）

（写真右）1973年マドリードの鴨居玲が住むマンションの前で。もたれているのは鴨居玲の愛車

写真提供／伊藤 誠



久利 下地に赤を使われていましたしね。

森本 坂崎さんの言う「昏いロマンチシズム」なんですよ。暗い一本の絵ではない。絵画というの

はやはり生と死を扱うものだから、鴨居くん自身も死に際を最後のモチーフにしたいと言つていま

したね。

鴨居さんと思ひますね。同じ世代でたくさん人物を描いていた人がいた中で、鴨居さんだけが残っているのは、何かひきつけられるものがあったのでしょう。暗い一方ではないんですよ。『廃兵』でも酔っぱらった男でも、下へだらりといつてしまふだけではなくて、ぐっと立ち上がるような何かを秘めているんですよ。

森本 両極端といえば、鴨居は「絵というものは努力するものじゃない。世の中は努力すれば何とかなる」という言い方があるけれど、それはちがう。努力で絵が描けるならおれは絵描きにはなん」と言つていました。一方で、ものを考へるのが苦手だから身体で苦しみみたいといって、裸婦のデッサンを連続して100枚描いたりしていました。片方で努力を否定しながら、努力をせずにいられなかつたんでしょう。

伊藤 彼の画業の中では小さなことですが、一時抽象へ走つたりしていましたよね。彼は大らかにようでいて、何か新しいことをやらなきゃいかんと常に言つていました。三角形のキャンバスを作つたりね。新しいことをするにはどうすればいいかというのはとても苦しんでいましたね。ベルギーにスピリアールトという画家がいまして、鴨居さんに似た暗い絵を描くのだけれど、鴨居さんの絵は暗いけれども、そこにはファイトがわいてくるような何かがあるんですよ。あれは難しい。さすが鴨居さんと思ひますね。同じ世代でたくさん人物を描いていた人がいた中で、鴨居さんだけが残っているのは、何かひきつけられるものがあったの

鴨居玲と日本的なもの

久利

鴨居さんは最後、宮沢賢治を描くと言つて

いたんですよ。（亡くなつた年の）9月にはうちの店で個展をしようと言つていたので、額縁も決めて、そのときに、長く描き続けてきた裸婦は打ち止めにして、今度は宮沢賢治を描くと言つておられました。そのための本が、亡くなつたあとたくさん届きました。それからなぜか注文していた靴と。やはりそういう意味では、日本へ回帰しておられたのだなと思いますね。宮沢賢治の「雨ニモマケズ」なんか読んでると、あれは経文だなと思います。

森本 ぼくは宮沢賢治が嫌いだから反対したけれど。彼が描きたいと言つてぼくが反対したのは2回あって、ひとつはパリにいるときに彼が人形を描こうかと思うというので、そんな血の通つてないものを描くのはやめとけと言つた。ふたつめは宮沢賢治。

伊藤 賢治は描いてほしかつたなあ。

久利 9月から描くと言つてましたから、たくさん資料がうちに届いていましたよ。

伊藤 金沢の石川県立美術館へ収蔵されるといつて、彼も非常に喜んでいた『一九八二年 私』といふ作品だけれど、あれが彼の代表作になつてしまふとしたら少しさみしいと思うんですよ。

森本 まったく同感。でもあれ以上生きていたとして、果たしてあの作品以上のものを描けたかどうかは疑問だと思うね。彼の絵のことについていえば、目の扱い方は日本の仏像に触発されてあつたが、そういうところも東洋的だつたのかな。

久利 鴨居さんの世界を創つたのは、日本的な誇りだと思う。当時一緒に暮らしていた女性となぜうまくいかなかつたかと考えたときに、ぼくが鴨居さんでおもしろい考え方をするなと思ったのは、彼女とケンカして、彼女が「すみませんでした！」と言うと、鴨居さんは「あなたはカタカナで謝る」と言うんですよ。

伊藤 彼女は日本的情緒があるようで、どちらかというといろいろな意味で日本人よりもロシア人の血が濃かつたようです。鴨居さんがヨーロッパに滞在中、私が訪ねたときは彼女との仲も平穏に見えたし、食事を作るのを手伝おうと言つたりやさしかつた。鴨居さんと私とふたりで街を歩いたりしたんですが、ふたりともフランス語がダメでね、あの美術館に行きたいけれど道が解らないから人に聞こうと言つんだけれども、鴨居さんは「おれが知つてからいいよ」と言いながらぐるぐる迷うんですよ（笑）。確かに隣りに日本人がいたら、ヘタなフランス語なんか聞かせたくないですからね、これはわかりますよ。鴨居さんは、言葉に関しては彼女に頼つていた感じでしたね。その人がいなかつたら外国生活は無理だし、その方が絵に集中できいい。うまくふたりで続いていくんだろうと想像したけれど…。

久利 その女性のお母さんが「あの子は偉い子なよ」と自分の娘を誉めていたことがあつて、「みんなにものを配るときに、あと3つしかないと言つたら、他の子を除けて前へ行くのよ、こんなに偉い子なよ」と言つうんです。それをぼくの母親に言つたら、それは当時、国際結婚をする方なら、そうでなくてはやつていけなかつたのよと言つてしましたが。そういう意味では、ヨーロッ

では鴨居さんはとても楽だったでしょう。日本に帰つたら、鴨居さんは彼女のことを「お母さん」と呼んでいました。例えば夫婦でケンカしても、日本人はふくれながらも「お風呂どうします」とか言つて擦り合せしながらいくけれど、彼女はそれにはなかつたですね。

神戸一ダンディな男

森本 ぼくが覚えてる中でいちばん「鴨居さんらしいな」という思い出は、鴨居さんが黒いスリッパを着ててるんだけど、真っ赤な裏地がついてるんですよ。それをときどきちらちらさせるんだよね、これに気付いてくれといわんばかりに(笑)。ぼくらがそれに気づくと「機嫌なんだな」と、ダンドイーな男でした。

久利 外車に乗つてトアロードを走つても、信号で長いこと停まるんですよ、みんなが見てるから(笑)。もう青ですよと言つても、まだ見てるからもう少し停まつていてと言つたり。

伊藤 パリでもとてもゆっくり車を走らせていましたよ(笑)。

——滞欧中のエピソードはありますか。

伊藤 パリで鴨居さんとピカソらの「洗濯船展」を見たんですよ。ふたりともとても興奮して、そのまま帰れんと言つて飲み歩いたんですが、帰り道で小雨が降り、枯葉が舞つてきて、なんともいい雰囲気。神戸にいるようだなと思いました。

森本 ぼくが行つたときも空港に迎えにきてくれたな。(愛犬)チータを連れてね。チータはでかいからよく目立つんだな(笑)。

伊藤 一回ね、私が乗つたパリ発ニース行きの飛行機が欠航して、パリで一泊することになつたんですよ。そのとき、乗客の中に日本人のお嬢さんがいらして、航空会社の方が私に、ニースまでエスコートしてくれないと頼まれたんです。私もそれを引き受けまして、パリにいた鴨居さんを呼んで一緒に食事をしたんです。そのお嬢さんは、バレリーナですと言つていてましたが、女学生のように見えまして、私は彼女に、この人は鴨居さんという方で、神戸の画家でと一生懸命説明したんです。途中、私たちと一緒にになって、そのお嬢さんがタバコを吸い出したんです。すると鴨居さんは、あなたは吸うのはやめなさい、と注意しましてね。というのも、その女性が女学生のように若く見えたからなんですが、鴨居さんと別れた翌朝、ホテルで彼女を朝食に誘つたときに、その女性がバレリーナの森下洋子さんだとわかつたんですよ。私はびっくりして、その後で鴨居さんに電話したら彼もとても驚いていました。てっきり女学生だとばかり思つて失礼なことを言つてしまつたと(笑)。ニースの空港には、当時婚約中でおられた清水哲太郎さんが迎えに来られていて、丁寧にご挨拶をされまして、本当にびっくりしました。

神戸の街が鴨居玲を再評価してほしい

——さきほども鴨居さんを見直したらという言葉がありましたか、最後に、鴨居さんと神戸についていかがですか。

伊藤 晩年の話をすると、私は(姫路市立美術館副館長として)姫路に行きました、鴨居さんも奥様とふたりで何かの展覧会に来てくれたんですよ。すると館の者もあのふたりを日本人だと思わない

んですよ。あれはどこの方ですかと言うので神戸の鴨居さんだと言うと、ああ、あの人鴨居さんですかと。それほど目立つ存在だったんです。姫路でもそうだし、神戸のこのモダンな雰囲気の中でも目立った存在でした。服装だけでなしに、資質の面でもあの人は目立つ何かを持っていたと思うんです。それをあの人は上手に活用してましたし、ある意味では絵の中にもそれが入り込んでいたのではないかという気がするんです。

森本 あれだけのデッサン力を持つていたのだから、ぼくはやはり、最後まで人物をつきつめてほしかった。

伊藤 いいところへ帰ったんでしょう。

森本 そういう意味で、帰ったことは良かったと思う。

伊藤 安井賞をもらったことが自信につながったと思いますね。

久利 ぼくは今「町衆」という言葉を商人として使っているとしているのですが、この原点は鴨居さんの言葉です。鴨居さんはよくぼくに「商人として金銭の美学を持ちなさい」ということを言わされました。それは例え、いわゆるイベントに頼った商売をしないということ、それもありますよと。鴨居さんがこんな賞をとったからというのではなく、鴨居さんの絵がいいから買いたいとか飾りたいとかいうのと同じで、こんなイベントがあつたからまたまここを通りかかってこの店に入つたというのではなくて、うちだつたら眼鏡がいいからお客様が来るという店を作りなさいと。イベントや権力に頼った商売を神戸はしていくべきではないと、自分たちが独立した力をもつて、お客様をひっぱってくるという考えを鴨居さんか

ら学んだ気がします。最後にいろいろものから離れて、たくさんやるべきことがある、時間が無いと言つておられましたが、時間がない、それは教えられました。

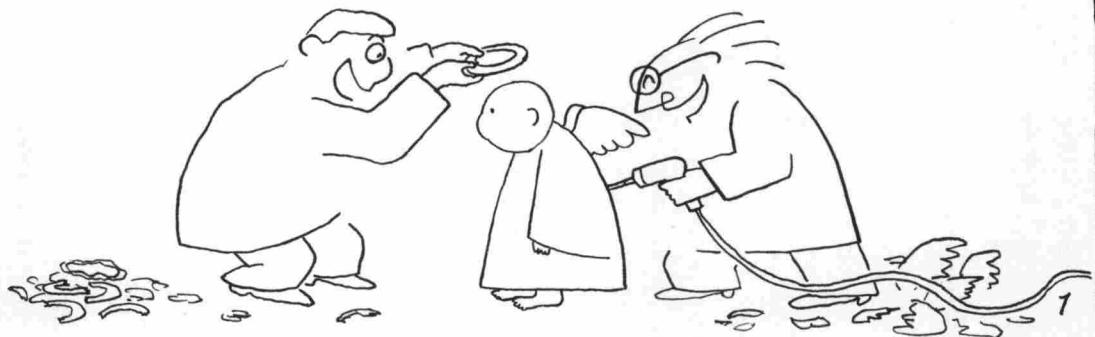
森本 ぼくがさんちかに勤めてさんちか広場を作ったときに、神戸の顔であるあの場所にホールを作らなければ、何か文化的な還元をしていかなくてはならないと思つたんです。その考え方で、鴨居さんは非常に共鳴してくれましたね。あらゆるところで宣伝してくれました。

伊藤 彼は他の画家の展覧会に招待されても、招待券を絶対に使いませんでしたね。ひとりの画家としてお金を出して、対等に作品を見るんだとよく言つていました。

森本 画家の真価が定まるのは、没後50年だといいますから、鴨居さんのこれからのお見本に期待したいと思います。

【鴨居玲略歴】	
1928(昭和3)年	2月3日石川県金沢市に生まれる。(1927年大阪生まれという説もある)姉はデザイナーの鴨居羊子。
1946(昭和21)年	金沢美術工芸専門学校に入学。
1948(昭和23)年	第2回二級展に初入選。
1952(昭和27)年	田中千代服装学園(芦屋)の講師となる。六甲洋画研究所で後進の指導にあたる。
1959(昭和34)年	ヨーロッパに渡る。
1961(昭和36)年	パリから帰国。神戸にアトリエを持つ。二級会脱退(1968年に再び会員に)。
1965(昭和40)年	ブラジルを流浪、パリに渡る。
1969(昭和44)年	「静止した刻」で第12回安井賞受賞。
1971(昭和46)年	スペイン・ラマンチャに住む。その後1976年まで制作を続け、帰国。
1979(昭和54)年	神戸新聞出版センターより素描集「酔って候」出版。
1980(昭和55)年	神戸市文化賞受賞
1982(昭和57)年	銀座で鴨居玲展開催。再び二級会脱退。
1984(昭和59)年	兵庫県文化賞受賞。
1985(昭和60)年	「鴨居玲画集—夢候」出版。9月7日、自宅にて急逝。自殺か事故か真相がはっきりしていない。

やったぞ！ 天使の完成じゃ！



この天使に世間を歩かせ
善の心をひろめるのじゃ



あれから 24時間……
どうしてますかね あの天使



世間の毒に
すっかりやられた
ようですね

